

# 地 理 学 と 総 合

— 私のささやかな試み —

稲 田 道 彦

## 1 地理学での総合

(地理学での総合の意識のされ方—地域の総合と事象の総合)

総合ということは、地理学では常に意識されてきたことであった。学問としての性格が学際的であり、研究対象・研究方法ともに隣接科学との接点が多く、常にそれらとの関係の中で独自性を主張するためには、多種の科学の総合を自身の内ではからねばならなかったからである。地理学の研究目的を、地表上でおきる人文・自然にわたる事象を包含する地域の差異を記述し・説明する、という見解に置くことに多くの研究者が同意してきた。地理学の研究の中で総合的に考えるという研究方法は、次の2つの研究のアプローチにうかがえよう。

1つはある限られた地域を言明するときに現れる。研究対象とする空間では、さまざまな現象がおこり、それらが集まり、結果として地域像という1つの場所の個性を形成している。地域は諸事象の複合的な総体の現れる舞台であり、また逆にその出現に影響を与えている。地域という場所は結果的に総合化された空間であるというイメージにもとづく考えである。つまり見方の問題として、地域は単に存在しているのではなく、それ自体が諸事象の総合化された結果であると考えるのである。この地域の個性—地域像(Landschaft という用語などで)をとらえることに多くの研究者の地理学的な興味を集めた時代があった。その伝統に今でも多くの地理学者が無意識に近いところで従っている。場所の個性は多種の現象が総合されてかもし出されるものであると考えられる。つまり地域内での諸事象の総合のされ方・結び付き方を解きほぐすことによって、総合化された地域の構造を示そうとするものである。また総合するという、諸事象

の結び付き方が、地域の個性を示しているとも考える。

第2の点は地域がさまざまなスケールで構成されることからくるものである。狭い地域（空間）を単位とすると、より広い地域は狭い地域が集まったものである。この議論はスケールの議論と重なり、取り上げているスケールにより、言明できる地域像が違うということである。それは例えば、香川県の場所の特徴が総て日本の特徴とはいえないことのようにである。日本には日本の地域像が外国との比較の上で策定される。いくつかの個性の異なる単位地域が集まったより広い地域を形成する場合、単位地域とは異なる性格の地域像が出現する。ここに総合化する際の問題がある。地域の特徴は相対的なもので、他との比較の中からいえることである。だから単位地域がゆるい結合の法則をもって集合し（これを総合化と考えている）、新しい性格を持つ地域像を形成する。その単位地域の集まる集合の構造に、総合するという問題を重ねて、この統合のアナロジーとして、総合を考えようとする態度である。この考えは分類されたものとそれらを包含している構造の関係に類似している。

上記の二つは、異種の事象の間の総合と、議論の前提を同じくする同種間の総合に分かれると思う。異種間の場合はそれらを総合する場合に総合させるための何らかの仕組み（総合という結び方？）が必要になろう。この仕組みの検出は相当困難で、総合の仕方のあるきまったやり方というものはまだ検出されていない。今は個々の事例において、どういう総合がなされたのかを検出し、考える段階にとどまっている。同種間の場合の総合は、総合の仕組みが階層性をもつので「分類」されたものと全体との関係に類推できるような、より整然とした全体の構造がぬきだせ、よりシステムティックに扱える特質があるのではないかと考える。

多くの地理の研究者が興味を抱いた学的興味はさまざまであるが、私達の多くは事象の空間配置の問題に特に多くの注意をむけた。なぜそこにある事象のそういう空間配置があるのか、どのような過程でそうなったのか、その事象の出現するに至った要因は何か、などの疑問を明らかにするために多くの方法がとられた。上記の疑問を解明するには単純な原因と結果をあげるだけでは説明がつかないことは明らかであろう。このように非常に広いともいえる学問対象

は、ある現象に限定する範囲（前提・定義）を設けて、単純化したなかで研究することの多い他の学問の学問的性格にくらべて、研究態度として、あれもこれも考慮の範囲にいれなければならない、その研究をおこなう際の、考えるべき要因を常に総合的に考えねばならないという命題がついて回っていた。現象を表出させる要因をあれもこれも並べて考えたらいいか？並列することでは総合したことにならないのではないか。総合とは一体どうすることなのか？この総合をどう考えるかという点と関係して、具体的には研究者が説明のためのどのような指標を選ぶのか、それらにどのような重みの差をつけるのかという点に、彼の個性が表出するともいえた。またその点に研究の価値が見いだされることもあった。いま私がつきあっているこの総合の問題は近代地理学創始当時から問題であった。そして今に持続してきているともいえる。地理学では始まりの辺りからの議論に、色々の解決のためのアイデアが提出されたが、決定打がでないまま今まできている。そして研究の精密化という現代的傾向のもとに個人の研究はより個人的、限定的領域の特定の事象に向かう傾向となり、事象の前提をより単純化・明確化し、その枠内での法則性追求という方向に向かっている。そこでは総合という問題は常に意識の根底にはあるのだが、テーマがあまりに大きすぎて、また困難すぎて、日常の研究課題にはなりにくくなっている。

#### （総合された状態のイメージ）

総合する方法はまだ確立できていない。であるから、こうすれば総合できるという方法を我々は求めている。現在の総合が論理的に解明できていない状態で、一体総合された状態とはどのような状態を考えるのか、イメージとして、私の持っている総合化された状態を考えてみよう。

まず部分と全体の関係が、動物の体のような関係として、全体を有機体としてとらえるイメージがある。体の部分はもともと同じような元素からできているのだが、手には手の形と機能が備わっている。頭には頭の形と機能があり、それは手とは全く違うところと、同じところがある。そして手と頭のような、違う機能と形をもつ部分同士が一緒になって、全体としての生命体の生物を形

成している。一個の生物の中には全く違う機能を持つ部分から成っている。この部分からと全体へとまとまり、1つの機能を見せていく過程に総合化の過程を見る。このアナロジーとして総合を考えることはかなり古くから唱えられている。機械の部品の働きと機械全体の働きが違うことにも例えられて、機械論ともいわれる議論もこの範疇であろう。ここには総合化の過程をわからないままブラックホールに入れておいて、総合された、全体に対しては明確なイメージがある。総合化された全体は部分の果たす機能の総和を越えた、全く質の違う機能を持ち、量においてもけた違いの働きをする。総合化とはこういうただ部分を集めた以上の働きをする役割を我々は暗に求めているのかも知れない。だから総合化という時に、こんなものではない。総合化すると、もっと崇高なもの・重宝なものが得られるはずだという期待感があるような気がする。

次に総合化されたもののイメージとして、ファイルボックスの中に集められたカードのイメージがある。百科事典のイメージとも重なる。検索するための配列なり、順番を決めた項目の配列はできているが、カード同士の前後の脈絡は少なく、大まかに区切られて並べられている、知識の総体である。これも総合体といえるのではないだろうか。ある興味でこの中から自分が必要とする知識を集め、自分で得られた知識を再構成し・組織化すると、そこに知識の総合体が出現する。ここでは総合化する方法はおこなう人の個性・目的・興味によりいく通りもの総合化がありうると思う。もし総合化したいという興味・アイデアがなければ、この知識のファイルボックスがあってもなんの役にも立たない。ここでの総合は必要な知識を集める考え・指針に大いに表れている。出来上がった総合体がどの程度総合化できているかは評価が難しい点があるが、総合する方法についてはハッキリとしたイメージがある。こうなると元の知識のファイルボックスは総合化されていなくて、ただの知識の集積に思える。さらに想像すると、ファイルボックスの知識全部を総合化することは究極の理想としてあげられる。このイメージには総合化はそれをおこなう人の意識というものが強く現れているという側面がある。

(総合は実態なのかそれとも抽象概念・意識なのか)

上で述べたファイルボックスから、必要な知識を抜き出す例にあらわれる個人の意識上の総合化とはどういうことであろうか。総合とはいろいろな物に興味を感じる個人的な意識からくるものであろうか？ただそれだけでもないような気がする。今まで地理学が求めてきたような総合された全体像としての地域像のような、総合された総合体がこれから実際に指摘できるのだろうか。その実際が示しうるのかどうか今も搜索途上にある。しかし地理ではこれがそうだとはっきり示すことはできる総合されたものが有機体の例のように具体的に示しうると長らく考えてきたとは思っている。しかしこれが総合されたものだという具体例が示されたことを聞かない。総合というのはいろいろな物の見方を同時に取り入れ、それらの見方の間に連絡をつけ、合理的に全体的に現象を説明できるという意識・抽象概念ではないかと思いはじめている。我々は総合に幻想を抱き過ぎたのではないか。いずれにしても総合が実態として存在するのか、単なる意識なのかはどこかではっきりできるものならしたいし、させてもらいたいと思う。

(地誌は総合である)

この地理学での総合ということに一つの見解を示したのが Hartshorne (1939, 改版 1961) であろう。彼は図 1 のように地理学の学問分野を考えた。研究の対象・方法を 2 つに分けて、法則定立をめざす一般地理学と個性記載科学として総合をめざす地誌に分ける。彼の学問観は当時のドイツ地理学の影響を受けていた。それは新カント学派に端を発し、Hettner らの地理学を含む科学の分類の思想の中から得たものである。Hettner らは学問には法則定立科学と、記述科学の 2 分類が根底にあり、地理学は後者に属するとした。Hertshorne は地理学の中に一般法則を樹立する系統地理の分野と、それらの成果を地域という単位で総合する地誌(地域地理学)という 2 つの分野を考えてきた。彼の学問方法は戦後の日本に導入され、日本での地理学の教育が系統地理と地誌の 2 本だてで行われていることにつながっている。総合をその学問方法にした地誌を彼はどう考えていたのか。総合であるが故に彼は地誌を地理学のゆきつく

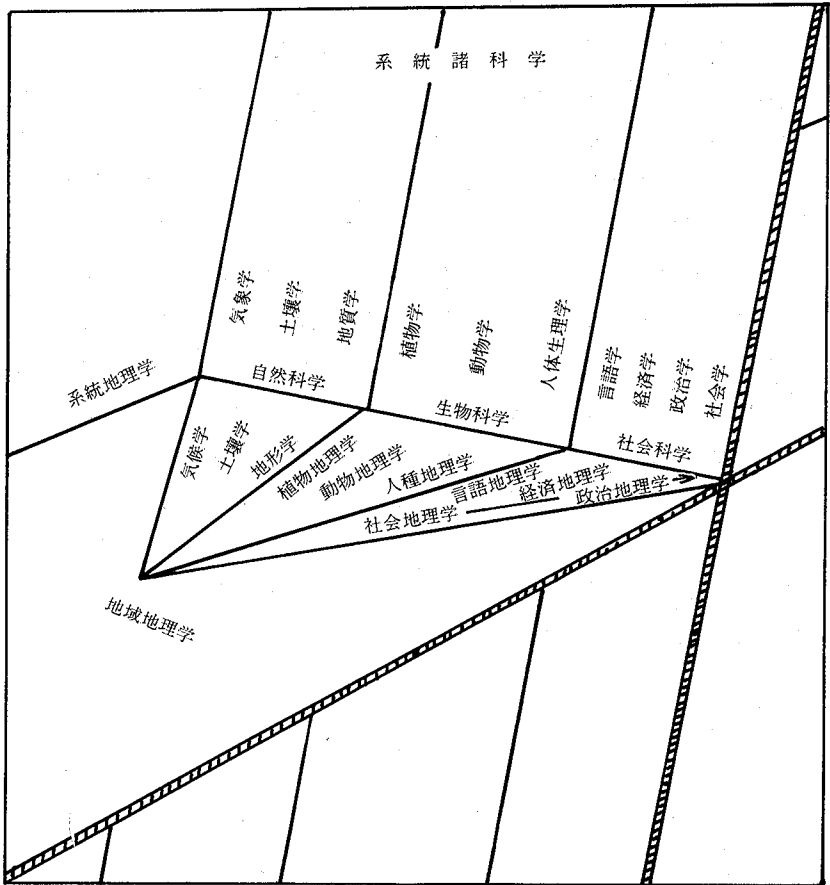


図1——地理学と系統諸科学との関係を示す図。面は文字どおり面の表面と考えるべきではなく、実在を研究する上での二つの相反する観点からあらわすものと考えべきである。地表の地域的の差をめぐりとして実在を見る見方は現象を種類別にして実在を考察する観点とすべての点で交わっている。地表内に見られるいろいろな現象を研究するいろいろな系統科学は、それに対応する系統地理学の各分枝と交わっている。地表上の特定の場所を焦点づけられた、系統地理学の全分枝の統合 (integration) は地域地理学である。

ハーツホーン・野村正七訳 (1962) P.155

究極の目標地として設定している。系統地理で研究された普遍概念に依拠した成果をちりばめた、地誌を彼は意図していた。Hartsuhorne の考える地誌学(地域地理学)での総合は単元地域内部の相互に関係しあった諸現象を理解するこ

と。そして単元地域を相互に関係づけ、より大きい地域の構造的及び機能組織を見いだすことの2段階に分けてあった。(1962, p. 511-522)。また地誌での総合ともいべき各地域単元の全てが相互間連的に結合した状態は、系統地理が普遍性をもつのに比べ、普遍性を持たない本質的にユニークな性質を考えている。場所において諸現象が統合されている姿を求めることが学問の目的として強くうちだされている。

Hartshorne のこういう地理学に対する考え方に対して、後の Harvey (1979, p. 139) はすべての事象の総合よりも、限定的な場面における総合を考えている。変化の過程を支配する理論と空間構造や空間形態に関する理論を結合させて新しい解釈を形作るような場合に。

ここで私なりに、今までの地誌学で必要な要素としてあげられることを整理してみると、1)ある限られた地域で起きる現象を扱い、現象自身ではなくそれらが生じている舞台である空間の特性として地域像を求める。2)地域像は地域内部で起こる現象の特性の総合されたものと等しいとみなされ、他の地域とはその性質の差を指摘できる性質である、地域区分によって、得られる地域のよりに空間的に分類可能な概念である。3)地域内の総ての性質を包含するように総合されたものが地域像である、4)地域内の現象の間に法則性を見ようとし、究極は地域全体をおおう法則を求める。ここでは法則や形態や構造を持った地域像を求める。論理的分析のみを強調する地誌学には常に未達成部分があるように私は感じていた。私は地誌学について簡単に述べたことがある(稲田 1986, p 91)。そこでは地域像として、論理的に解明された部分だけでなく、人間の場所に対する心理的なイメージをも含ませた存在としての地域的総合体の地誌を考えた。このように考えた理由として、私の中で総合するということが分析的にかつ論理的に理解・納得することが困難だという点が常にあった。これで本当に総合されているのかという反問でもあった。それに今の時点では分析不可能のイメージというアイデアを付け加えることで、私のイメージとしての地域像に近いより、総合的な地域像にしようとしたものであった。

(教育としての地誌、教師において総合されるのか、教材が総合されているのか、学習者が総合するのか、)

学問としての地誌学の目的には総合が前面にでている。こういう頭の中だけで考えた理想的ともいえる状態(現実には実現困難な点も多い)の総合をにらみながら、多くの教師が現実に授業として、教える教材として地誌を扱わねばならなかった。授業においても総合はその目的の一つであるが、その他に地誌には日本・外国などの場所についての、成人して社会生活を送れる程度の基本的な知識を教える。また自分達の生活・文化を他所の比較により相対的なものとしてみることができ、自分達を理解する手助けになる、という役割が負わされてきた。実際的には後者の目的が学校では大きく扱われたのではないだろうか。では日本での地誌は実際にはどういう教材があげられているのであろうか。高等学校までに、地誌学の授業は郷土・日本・世界とだんだん広い世界を扱うようにカリキュラムが構成されている。そして題材の総合化は各地各地のその地域の特性を最も示していると思われる事項を中心にそれに付随する知識を与えることにより、地域的に総合化しようとしている。

長い年月の間に、多くの教科書の書かれる教材が固定化され、教科書の中での教材の総合化が進んできている。教材での総合の具体的な事例を知るためにある中学教科書の地理でのアングロアメリカの記述を示す。番号のついているのが大項目でそうでないのが小項目である。1 地図をながめて、アングロアメリカの成り立ち、自然のようす、アングロアメリカの人々の生活、2 経済力のゆたかなアメリカ合衆国、資源にめぐまれた国土、高度な技術をもった工業、機械化された大規模農業、地域によって異なる作物、巨大都市群、世界へ進出 3 アメリカ合衆国と結びつきの強いカナダ、ゆたかな資源、アメリカ合衆国と結びつく経済、とならんでいる。さらにかなり分量のあるコラムとして、デトロイトの自動車工業と黒人問題があげられている。書かれていることは吟味された事実のつかさねである。そしてこの地域を考へるときには当然ふれなければならない特徴的事項を網羅してある。教材としてもられた特徴的なキーワードを綴っていくと地域像が描けるようになっていく。入学試験を意識して他の教科書と違うことを恐れ、また余り微細な知識を入れたくないなどの理由



があるのだろうが、長い間に、多くの教科書に登場する知識・語句は精選され、教材として高度に総合化が進んでいる。それが結果的に非常に類似してきている。しかしこれを学んで児童生徒が総合化したアメリカ像を形成したであろうか。

最近おかしな話を聞いた。あるいはふざけて言っているのかも知れないが、アメリカは友好国でよい国で、日本と過去に戦争なんかしなかったのではないか。ソ連の間違いではないか。また続けると、南アフリカは黒人差別をしている悪い国だ。アメリカは裕福で、東南アジアは貧しい国である。新潟平野は農業が盛んで、専業農家が多い。このうち例えば、南アフリカにあって、彼の国の人は差別と戦う多くの白人・黒人の存在も含めて全てが、悪い国というイメージを背負わなければならないのか。建前ではないことになっているが、良い国アメリカにも黒人差別は現実存在する。上記のような単純なイメージに還元された地誌の学習結果に接すると、地誌の学習は単なる知識の習得では決して終らせてはならないと思う。どうも外国なりよその国の人に対して、自分と同じ立場でみるという、他人に共感する姿勢が欠けているようである。簡単に評論家の位置・または第三者の位置に立って評価する傾向がある。自分を棚あげしておいて、他に対して良い・悪いという価値判断を持ち込みすぎである。このような状態は、なんら地誌を学ぶことになっていないのではないか。なんか知識の総合化の過程が間違っていて、私に言わせれば間違った地域像を形成したのではないかという思いがする。

また、確かに従来力点がおかれた総合化された教材開発も大切であろうが、教えられる側が総合化するのだという立場を強調した地誌の教材の開発もあろうのではないかと考える。

さらに教材を扱う教師においても彼の中で知識の総合化はなされていなければならないとも思う。しかしどうすればよいのかという点にはまだ答えられない。

#### (総合のむずかしさー総合と分類ー)

地理学では総合という概念が、各種の情報を載せた単位としての地域、そこ

には地形も気候も土壌も人々の生活も全てを載せている結合総体としての存在が考えられてきた。地域のシステムの中に総合を考えてきた。逆なようであるが、総合が分類と密度に関連して考えられてきた。総合は分析と逆向きの考え方である。地域システムの中では分析されたものが小単位ながら、その内に総合体をなしている。よくできた分類はその分類体系の構造が、部分単位同士の関係の持ち方が明瞭で組織的なので、総合という総体の持つ集合の要素の関係を把握・理解しやすいのである。つまり分類する時と、逆の方向の思考をたどれば総合に行き着くという訳である。総合とは地域という集合の要素が、論理的につながった構造体として考えられていた。地域システムを明らかにする理論的分類が総合への早道であるとも考えられた。

## 2 授業での総合の試み

私が香川大学で担当してきた一般教育の授業を材料にして、それを、総合という視点から考えてみたい。この章で問いたいことは、一人の人がおこなう総合的な授業は可能なのであろうか。総合的な学問分野であると述べた地理の授業が果たして、総合となっていたのであろうか。授業での総合的とは、どういふことなのだろうか。さらに総合には教材の総合・教師の総合・学生の側の総合といくつかの側面があると思われるが、果たしてそれが実際の授業の中でどういふ関連をおよぼしあっているのであろうかということを考えてみたいと思っている。もともと新米教師が講義ノートを作りながらの授業で、かつ時間を消化するのが精一杯の授業の積み重ねであったから、授業のときに、総合ということなど頭のどこにもなかった。この総合という文章を書くのをきっかけに私の授業を見直して、これからの授業の改善につなげたいという気持ちもある。

私の担当した講義題目は「世界の自然環境」(1979)、「世界農業の形成過程」(1980—1982, 1984—1986)、「死をめぐる文化地理」(1984—)、「離島の地理」(1987—) 演習科目では、「地理学のあゆみ」(1979—1980)、「中国」(1981)、「居住地の地理学」(1984)、「南島の自然と文化」(1985—)である。直接的に、教師が授業の内容に関わる講義科目での授業の実際を知ってもらうために、煩

項になるが講義の中で私が話そうとした項目を述べ、私の設定した授業の目的を次に述べる。1979年の講義に関しては資料がないので省略する。

「世界農業の形成過程」では【農業地理とは】地域区分、気候区分、【自然環境】エネルギー循環、光合成、積算温度、土壌の構造、農業にとって望ましい土、土壌型、肥料【栽培作物】栽培型植物、休眠性、脱粒性、雑草、種子競争【農業の起源】作物の起源と伝播【移動耕作】特徴、生態的意味、アジア、アメリカ、アフリカ、ヨーロッパ、日本【遊牧】砂漠、大気大循環、降雨、遊牧民、闘争と交易、家畜、砂漠化、定住【稲作】水田という耕地、稲の起源、冷害と品種、アジア、緑の革命、日本、現代の稲作【地中海農業】乾燥農法、休閒、ローマ時代、カリフォルニア、現代【混合農業】有畜農業、三圃式農業、改良四圃式農業、現代ヨーロッパ【酪農】バター・チーズの作り方、歴史、生乳、ヨーロッパ、アメリカ、現代【プランテーション】定義、歴史、作物、南米、アメリカ、アジア、奴隷、アフリカ、小農、熱帯土壌【ランシング】スペイン、アメリカ、南米、現状【大規模機械化農業】小麦、アメリカ、ソ連、コルホーズ・ソフホーズ、機械【現代日本の農業】農地改革、機械化、販売、農業政策の順で授業を展開した。上記の【 】に書いたことが大項目で、その次にくる項目がトピックである。

この授業では、Grigg (1974) による授業タイトルと同名の訳本があり、彼は農業の起源と伝播、農業発達の歴史を記述の中心にすえている。彼の著作を参考にしながら私は目的を次のように考えていた。教養過程にある低学年の学生への地理学的考え方の導入として、農業は自然環境と人間の活動の両方にまたがる総合的な人間の活動であることを認識させることをねらっていた。農業が非常に多岐にわたる事項との関係でとらえなければならないこと、関係ということでは、この授業では最後の部分で、政治・経済が現在農業に大きな影響力を行使することまで思考の範囲にいれてもらいたかった。更に学生が専門学部へ進んだときに、卒業研究にまでつながるような興味の芽をいただければという期待もあった。この授業は夏休みにレポートを課した。それは、身近にある一軒の農家を取り上げ、その農家の第2次世界大戦後の農業経営の変化を、農家がどう考え、どう行動したかを聞き取り調査してくることを望んでいた。

私は農家が時代の変化の中で合理的な思考・判断をしていることを知り、農業従事者は受動的で、ただ黙々と働くというイメージを持つ学生にはそれを払拭してもらいたかった。

同じように「死をめぐる文化地理」についても講義の組立を述べてみよう。

①地理学・文化・死がテーマである。②生物の集団の中での死の意味、生が定義できない、死の判定の不確定性、脳死、老化と死、医学的な死体の変化、臨死体験（他界のイメージ）③死と人の精神変化（ロス）、人の死の受け止め方④日本人の葬制・墓制、縄文・弥生・古代・平安・中世、⑤日本の葬法の歴史、支配者階級と庶民、特殊葬法、両墓制⑥日本各地の葬法、葬式の順序・方法、⑦スライドをみせる。香川、伊豆七島、かくれキリシタン、中国人墓地、ヨーロッパ⑧アリエスの「死と歴史」、死にたいする感覚が変化した、西洋での死、ヨーロッパの墓地、⑨アジアの葬法（朝鮮、旧満州、北中国）、⑩アジアの葬法（南中国、インドシナ、インド、南太平洋）、文化圏と葬法⑪シャーマニズムと死後の世界⑫イメージの世界としての他界、地獄・極楽⑬現代人と死、これからの死をめぐる文化地理

この授業は人の死をめぐる文化、例えば生者の死者との対応の仕方、感情の持ち方、死体処理の方法、儀式・儀礼には地域差・時代差があるということを引きかけにして、文化を空間的な広がりとしてみる地理学の問題にとどめないで、誰にもいずれはくる死の問題を考えてみたいと意図している。墓制に関する文化圏、文化伝播を筆者は現在の研究テーマにしているので、演者の興味に従って、授業を配列している。教材が教師にとって総合化された状態であって欲しいのであるが、まだ総合化しているという実感はない。レポートとしては読書感想文を求めている。今までテキストにしたのは深沢七郎著「檀山節考」、千葉敦子著「よく生きることはよく死ぬことだ」、「『死の順備』日記」である。さらに墓制・葬制の文化に関する文献調査による報告を求めている。

次に、「世界農業の形成過程」に替えて本年から始めた「離島の地理」の授業の流れを述べる。①離島性について、②離島の定義、高島・低島について、自然的性格では定義できない。③島嶼性・離島性とは人文的・社会的な尺度による、離島振興法④伊豆諸島の青ヶ島について、地図（読図）、噴火と遷住（年表）、

⑤青ヶ島のスライド、人口と産業、民俗文化、⑥小笠原島の歴史(年表)、拓殖・開発、欧米との関係⑦小笠原の生活、スライド、⑧沖縄諸島、自然、サンゴ礁、動物地理、気候、⑨沖縄諸島の歴史(年表)、尚王朝、中国との関係、沖縄文化、人頭税、ユタ、墓制、島の開発、⑩沖縄諸島のスライド、舞踊、言葉、⑪五島列島(年表)、隠れキリシタン、中国との関係、⑫壱岐(年表)対馬(年表)、朝鮮との関係、元寇、生活、⑬瀬戸内海諸島、塩飽水軍、過疎、人名、志々島、家船、大工の島、⑭隠岐ノ島、

授業でめざすものは、島という日本の国の周辺部でおきた歴史や、そこでの人々を生活を知ることより、自分達の現在の生活のおかれている相対的な位置を再確認してほしかった。離島は、その場所的位置ゆえに外国との関係も直接的で、複雑である。我々が習う日本歴史の中では出てこないささいなことが島では非常に大きな意味を持ち、現在の生活・文化まで拘束する歴史的事実だったりする。外国と同じく日本国内に対しても、いろいろな生活・価値観・歴史の流れがあるという複眼的思考を形成してもらいたいと思い、学生にとってはなじみのない離島の地誌をめざしている。授業とは別に、読書感想のレポートを課した。テキストは有吉佐和子著、「私は忘れない」、「海暗」、であった。この授業では一つの試みとして、日曜日に希望する受講生を連れて、瀬戸内海の島を日曜巡検した。本年は香川県多度津町高見島を訪れた。自分達の生活との差を感じ、ある種のカルチャーショックをうけた学生もいたようであった。

以上述べたこれらの授業が総合という点ではどう考えられるであろうか。まず、教師の総合という点を考えよう。なるほど項目は多種の分野に渡っている。しかしそこにあるのは私の頭の中で、私の興味に従い、配列した知識の構成である。私の中では総合したつもりでも、とてもうまく総合できているとは思えない。それは次から次へと勉強しなければならないことが出てくることから言える。教材としての総合はどうであろうか。地理という学問の性格もあって、内容は多岐にわたっているけれど、それを載せている空間による、一貫した方針にしたがう分析ということまでいっていない授業の構成になっている。教材の総合化をめざしていたが、どうも結果的に教師の側の総合をより強くめざすという状況になっていたようである。

一番難しく、これからどうしても考えねばならない点が、学生の側での総合という問題であろう。学生には個性があり、興味・関心が違っている。1人1人が授業の中で、個性に応じた総合化がなされるよう授業ができれば理想であろう。受講生を制限する、学生に常に分からないことを問いながら進める、など授業として改善できることはあるであろうが、学生の側にある総合化する過程は個人により一様でないことが予想されるだけに、総合化することの困難な点をふくんでいる。

例えば教授団の活性化をはかる F.D. のようなシステムを、総合化のために、学生の総合化、教材の総合化、そして教師の総合化という、3者間のお互いに評価しあうシステムを作る必要があるのではないだろうか。特に学生の側の総合化の状況が教員に伝わりにくく、今では彼らの個人的な理解にまかされている状態ではないだろうか。簡単なアンケートのようなものから、私は自分の授業の評価を学生に聞くことから始めてみたいと思っている。

### 3 おわりに

総合をめざすことが学問の性格に関わっている地理学での総合、という問題をいたらぬままとりあげてみた。私には総合ということは課題ばかりあって、解決のついた問題は指摘することができなかった。地理学での総合という方法が強く現れている地誌学もその方法をめぐって議論がなされている（例えば中村・岩田 1986）。総合化するとはどうすることなのか、総合化された状態とはどのような状態なのか、私にとってはこの点がこれからも総合を考えるときに大きい問題のように思える。これについて、簡単に結論は出せないけれど、将来の問題としてあげておきたい。また総合化する立場として、教師と学生がある。その間に教材という、題材として総合化されてなければならないものがある。これら3者の関係の持ち方をより情報の伝達がよいように、また容易に改善がなされるようなシステムを考えていきたい。

紙面をかりまして、いつも授業や地理学をめぐる、多くの学問に関する問題について、私との議論の中でいろいろの示唆やアドバイスを与えてくれる同僚

の新見治氏に感謝いたします。彼との議論の中で、授業の改善や、この文章を書くいくつかのアイデアも得ました。

## 参 考 文 献

- 有吉佐和子 (1969) 私は忘れない 新潮文庫 290 p  
有吉佐和子 (1972) 海暗 新潮文庫 342 p  
稲田道彦 (1986) 地獄の風景の構図 中村和郎・岩田修二編地誌学を学べる 古今書院 91-103 p  
千葉敦子 (1987) よく死ぬことはよく生きることだ 文芸春秋 214 p  
千葉敦子 (1987) 「死の準備」日記 朝日新聞社 211 p  
中村和郎・岩田修二編 (1986) 地誌学を考える 古今書院 261 p  
能登志雄他 (1985) 社会科中学新地理 世界の人々とわが国土 初訂版 帝国書院 298 p  
深沢七郎 (1964) 檜山節考 新潮文庫 33-94 p  
Grigg D. B. (1974) The agricultural systems of the world An Evolutionary Approach Cambridge University Press 358 p, 飯沼・山内・宇佐見訳 (1977) 世界農業の形成過程 大明堂 456 p  
Hartshorne Richard (1939, 改版 1961) ; The nature of Geography-A critical survey of current thought in the light of the past-, Annals of Association of American Geographers, Vol. 29, No. 3, 4 1948 p, 野村正七訳 (1962) ハーツホン地理学方法論 朝倉書店 586 p  
Harvey D. (1969) Explanation in Geography Edward Arnold 521 p, 松本正美訳 (1979) 地理学基礎論—地理学における説明— 古今書院 352 p